

息子のあなたへ（あとがきにかえて）

私はあなたの死を悲しみの中で、

あなたが、お母さんよりわしは早く死にたいという言葉を出して、病を得たあなたを私より早く死んだ方がいいという態度を取ったのだろうか、遺影の前で反芻する毎日です。

病みながらも自己主張を持ち、楽しく生きていらっしやる多くの患者さんのお手伝いをする職業を得て退職した私に、「愛生園でお母さんは育てて貰ったな」と誉めてくれたでしょう。どんなになっても、生きていてほしいと思うのが親なのに……。

逆さまをみる人生がどんなに悲しいことか。でもお母さんはこれから生きて行かなければなりません。



あなたの生きたあかしとして、あなたが望んでいたあなたの短歌を自費出版しようと思ひ立ちました。あなたの妹も後押ししてくれました。写真を撮ってくれたり印刷してくれたり、泣いたり笑ったりして進めております。

三十年来のあなたのお友達から「小山君のことを詠んだ三枝昂之氏の短歌を許可をいただいて載せたら」と提案いただきました。「えらく感動してた」ともう一人の先生も……。

早速お願いをしましたところ、三枝様からお電話をいただき、歌評等書かせてと申し出がありました。嬉しいでしょう。お母さんも電話口で感涙してしまいました。

何冊も短歌の本を出されており、宮中歌会始の選者でもある、歌人の先生に取り上げていただけるのですから、夢のようですね。

あなたは「ちょっと二階に来て」と私を呼びましたね。それは入院一ヶ月程前のこと、「このダンボールに『りとむ』の同人誌がある。これが預金通帳、保険証、年金証書……、お母さん、預って」「どうして」「面倒くさくなったんだ」「お金のことがわずらわしい?」「前に言っただろう。お母さんが死んでも、わしが先に死んでも内輪でやろうなあ」

この事は前々から相談を受けていたことではありましたけど……。

「家を建てたからな、貯金はあまりないけど使って」「気前がいいけど、どうして」「短歌の自費出版がな……」と後は言葉を濁しましたね。

薬が変更になってから、あなたは眠れなくなっていたのですね。以前の薬の説明に、「この薬をかえた時、重症化する事があります」とありましたが、病院の先生がされる事でまさかと思っていました。面会に行くたび体力は衰えているのがわかりました。あなたは無口になっていきました。でも電話では、「今度はいつ来てくれるん」これが精一杯の言葉になっていきましたね。そして「ありがとう。おいしかった!!」

看護婦さんに食べさせた量を問われて注意され、お母さん達はこんなに欲しいのに、時間を掛けてでも腹一杯食べさせてあげたいのに……。医療の場に少しでも居た私達は、その指示に従うより他に為す術もなかったのです。ごめんなさい。

あなたは大学の在学中に家からの送金が遅れて、水を飲んで一日を過ごしたり、友人のお母さんや友人にお世話になったりしたりと話してくれましたね。その事を話すのは、いつも旅先の旅館のごちそうを目の前にした時でしたね。

「あの時のごちそうは、これよりうまかったよ」

親の不甲斐なさを反省し、いつの時も周囲の方々に守られて助けていただいていたのでしたね。今更に感謝しております。

小学校一年生位の頃でしたか、うさぎに餌をあげるのを忘れて登校し、思い出して授業中に泣いていたら、先生に「家の人が気付いてあげているよ」と言っても、

「僕が係だから」と帰って来たことがありましたね。責任感が優しいのか、自分

の心をコントロール出来ない男らしくないと父親はあなたの事を心配していましたよ。

そんなあなたが高校の時でしたか、友達と二人で自転車で京都まで無銭旅行だと言って出かけました。民生委員をしている老婆の家に一泊させて頂き、小遣い等貰ったって……。

「いい先生になりなさいよ」と見送ってくれたという。あなたが大学に入ってから、東京の帰りに民生委員のおばあちゃんを訪ねたけど会えなかった。亡くなってたと落胆の様子でしたが、お母さんは想像しましたよ。誇らしげに早稲田の角帽を被り、学生服で（それしかないものね）教育学部へ入れたと、あなたは自信満々で報告に行ったのでしょうか。ほんとに残念でしたね。



もう誰も崩せぬ我の道ありて

八月の蟬 八月の青空そら

と詠んだ頃、あなたは日蓮聖人の門下に入ったのですね。まだ大学生だった。どんな活動をしていたのか、お母さんには判らなかつたけど、真新しい革靴がすり減つてボロボロになっていたのを見て、あの当時のすさまじい活動に参加していたのかなとも思ったことでした。東大紛争とか、早稲田も赤軍派の事件等々、善悪は別として一部の人としてもその当時の若者のエネルギーはすさまじかつたと思います。

田舎出の若者がそれに染まる事もなく無事に岡山に帰って来てくれた事は、やはり信仰のおかげかなと密かに思ったものでした。あなたは短歌への夢を持っていましたから。

一年遅れで卒業して、学校の先生として職を得たのですが、この頃はまだ創価学会という宗教は何かと世間の理解も乏しかったのですね。現にお父さんはかたくなに否定した時期もありましたが、余りにも毎晩遅く帰ってくる息子を案じてのことでした。宗教は個人の自由だからな、とは言っておりましたでしょう。やっばりお父さんは、あなたのことを信じる一番の人でした。あなたがお父さんの介護もあつて、定年退職を待たずに勤めを終えた時、今生の別れにあなたへの贈り物のように、創価学会に帰依して最期を迎えましたものね。

課外活動で生徒を引率しての帰り道、金剛川に流されていた老夫婦を同僚の先生と助け上げ、警察署から感謝状や記念品を貰いましたでしょう。学校の生徒さんの事等、話題にも聞かせてくれなかつたあなたが私にこう言いました。

「お母さんに聞くけど、流されていたおじいさんを河原に助け上げた時、一番におじいさんが何と言ったと思う？」

「それはありがとうございます」

「いや、生徒にも尋ねたよ。みんな声を揃えてありがとうだと言った。けれどそれが違うんだ。『おばあは大丈夫か?』だったよ」

「もう一人の先生が、『それ見て』と言うと、『ありがとう、ありがとう』だったよ」

「そして、生徒がシーンとしたなあ」

農業用のビニールを川で洗っていて、流れが速いのでおばあさんが流されたのを、おじいさんが助けようとしておじいさんも流された。水位は浅かったけれども年寄りだから立てなかつたらしいということでしたね。

「君等はいつか結婚するだろうから、いや、結婚しなければ……。いくつになっても相手を思いやる心を持ち続けてほしいな」「学校は知識だけを教えるのも当然だが、こんな事も教材になるんだよ」だって……。

君を愛すゆえにわれ在り武蔵野に

憩うりえこよりえこよ生きよ

愛すこと愛されることそれぞれに

遙けき道よ我も生きたし



二首の短歌の走り書きが、この際にあなたの机の引き出しから見つけられました。自分の荷物を東京に一人で送り別れて行ったあなたの妻。

「止めないの?」と言うと、「止めても無駄。思う通りにさせてやるんだ」それがあなたの優しさだったのでしょうか。お母さん達には理解出来ない事でした。

人生に疲れたと言う十八の

君に語らむわれの半生

という短歌もありましたが、生徒さんに語りましたか……。

早稲田の校歌を授業中に歌う先生!! 生徒にねだられたにせよ、臆することもなく。

中学時代からあなたは「お母さんは戦時中に東京の方に住んでいたんだろう。早稲田大学知ってる?」「知ってるけど、行った事はないわ」

この頃から早稲田大学にあこがれていたのでしょうね。とても私学に行ける財力はないと父親に宣言されても……。これだけか送金出来ないと言われても、早稲田に合格しなかったら、大学は諦めて就職すると約束したのでしたね。高校時代、しきりに新聞社の短歌の欄に応募して入選していたこともあって、夢を追っていたのですね。

筆記用具や原稿用紙、便箋を持っていても、手紙一本も短歌一首も書き留めてはいませんでしたね。

あなたの頭は混乱しているはずなのに、オリンピックのマラソンの代表になった重友さんの応援の募金活動を伝えると、「みんな今も仲良しだな」とひとこと言いました。があなたは四十年位前、担任だった当手を思い起させたのでしょうかね。最後まで、あなたは学校の先生でした。

あなたの教え子さんの重友選手のお母さんから記念の備前焼が送られてきた時は、もうあなたはこの世の人ではありませんでしたけど、お床に置いて飾ってありますよ。警察署から感謝状と共に。



例えば主治医の先生が、「この期を逃したら外泊の機会が……」とおっしゃって外泊許可をくださった。この期を逃したら……、この後どう続くのか、お母さん達はその真意を尋ねたかったけど、一度口に出して叱られたことがあって、聞き返す事をためらいました。

二回ほど、喉に食べ物を詰まらせて、見る見るうちに顔が赤くなり紫色になって、早い処置をしていただいて事なきを得ましたね。

「流動食を食事中に詰まらせて、チアノーゼが取れなくて点滴で一週間様子観察中」で、管理室の隣にあなたは寝かされていました。嚥下困難な症状が!! こんな事を繰り返していたらそのうち肺炎に? そして胃ろうという方向に……、世間一般に今問題視されている過程の医療のあり方を思い浮かべていました。悪い方へ悪い方へと気持ち片寄っていくんです。

「おばあちゃん、チャンチャン、頭が熱いよ」小学六年生の曾孫が、私に知らせて

きました。体温計を出してきて、あなたの姪の可愛い子が熱を計ってくれたでしょう。その時は三十八度位だったよね。それでもお寿司をとろみをつけて流動食にしたのでも、おいしい、おいしいと言って食べてくれましたね。そのうち顔が赤くなり、四十度にも熱が上ってきました。

私達はあわてました。やはり肺炎だろうか? 家に帰る妹の自動車の中でブルブルあなたは震えていましたね。久しぶりに乗る車に怖がっているのかと、それは熱の出る前の悪寒だったのですね。

病院にこの次第を報告すると、こちらに連れて来て下さいと。その日は連休の中頃でした。救急車で他の病院に搬送して貰う事等思い浮かびませんでした。本当にごめんなさい。

妹の自家用車の後部座席で、お母さんはあなたの手を元氣出さないよと、心を込めて握りしめました。あなたは握り返してはくれませんでしたね。お母さんは

どうしたのか涙が止まりませんでした。

そしてあくる日、「お母さん、熱下がったから安心して」と、電話をくれましたね。それこそ元気な時の口調でした。なのに……。

連休が明けた次の日、女の声で「転院となりましたので、何時頃こちらへこられますか」

妹の主人の母親があいにく手術の日で、お母さんは知らせるのをはばかり、一人で自分で運転して駆けつけました。看護師さんがついて来てくれました。あなたと会えたのはもう午後の三時半も過ぎた頃でした。ストレッチャーに乗せられて、次々検査のようでした。お母さんは診察室に呼ばれて、女医先生から病気の説明を受け、担当医を紹介されました。

胆管炎で抗生物質が今のところ効かない旨の説明でした。あまりにも疲れた様子だったので、毎日でもこれからは来るからと、ひとまずは今日は帰る旨をあなたに

言って帰りましたね。でもあなたは目も開けてくれませんでした。

毎日来るからと言いながら、十一日は来られないだと私は告げました。あなたの妹が、「お母さんは、あの年でまだ自動車に乗るんだって!!」あなたは声を出して笑いました。その日は高齢者の講習を予約していた日でしたの。

今思えば後日にすべきだったのですね。私はあなたの笑い声に惑わされていました。胆のう炎といえばお腹が痛むんですね。一向にそんな態度を見せないあなたに、死期が迫っているとも知らず、お母さんはほんとに無知でした。いや、私を残してこの子が死ぬものか!! 現実を受け入れられない母でした。

「今朝、容態が急変しまして……」と、胆のうの写ってない画像を提示されて、目の前は真っ黒になった思いでした。

「先生、入院時の治療計画と違いますよ。推定される入院期間は約三週間でした。まだ一週間もたっていないですよ」と心の中でお母さんは叫んでおりました。



あなたの妹は冷静でした。「おかあさん!!」と牽制するように私の心に響きました。熱が高く、敗血症になりかけていますと、先生の言葉も暗く、処置なしという事です。この場になって願う事は、静かに楽に逝かせて下さいという言葉より他にありません。

あなたの妹は、重篤の連絡をしてくれて、義弟や姪等かけつけてくれました。わかりましたか、聞こえましたか？ みんなの声が……。叔父が来てくれて「わかるか、わかったら手を上げてくれ」と言ったら、昨日は手を上げたって聞いたばかりなのに……」

一度大きく目をあけて何を見たのでしょうか、心持ち笑みを浮かべて静かに閉じた。足元に置かれたモニターが、サーと消えていった。妹達も立ち上がった。先生が時刻を告げた。あなたとの永遠の別れが現実になった。それなのに涙は出なかつたお母さん!!

あなたは自分の若い死を予期していたのですか。「我も生きたし」との歌がありますのに……。あの微笑みは何でした。お父さんやおじいさん、おばあさんが迎えるに来てくれたのですか。「俺の妻はお前だけだよ」といつて会いましたか。

あなたの生前の祈りで、お母さんも時が来ればあなた達の森へゆけるのでしょうか……。

「自分で祈れよ!!」あなたはきつとそう言うでしょう。お母さんは自問自答しながら涙をのみこんでおりました。あなたの妹が、姪が、それぞれにポツリ、ポツリと言っていました。

「今日は母の日なのに」

「チャンチャンはお嫁さんも子供もなかったけど、結構幸せだったんだよ」

そう信じることにしなければ……。



お疲れさまでした。あなたはいつも面会室に歩いて来ていました。テレビも見ていたし、カラオケで歌ってもしましたね。あんなに痩せていても歩いていたのです。

精一杯生きてくれたこと、忘れはしません。

あなたの温かい心の短歌を残してくれてありがとうございます。

楽しい思い出をたくさんありがとうございます。

ほんとうに、ほんとうにありがとうございます。

机に向かってしていると、わけもなく涙が出てエンピツを置くと、また思い出したようにしたためる。そんな日々の綴りでした。皆様にはきつと読みづらい文章であった事でしょう。

皆様の寛大なお心で、お許しただければ幸せでございます。貴重なお時間を頂

戴致しました皆様の上に、幸多かれと念じつつ御礼とさせていただきます。

最後になりましたが、三枝昂之様には息子の短歌の歌評をしていただき、息子のつたない短歌も輝きましたこと、深く御礼申し上げますと共に、未永く御活躍くださいますようお願いいたします。

また、丸善の編集長の早瀬様には適格なアドバイス、温かい応援をいただいて、どんなに心強かった事か、ほんとうにお世話になりました。

輝基への手紙をもって、あとがきにかえさせていただきます。

平成二十五年 四月吉日

小山 津彌子